

絵やオブジェを楽しみながら創作することで脳の活性化などの効果が期待される
臨床美術(臨床美術)の活用が、鳥取県内で広がっている。高齢者を対象にした講座や小中学校での授業だけでなく、障害のある人たちも一緒に楽しんでいる。関係者は、自己肯定感を高めるといった効果にも期待を寄せる。(田子誉樹)

創作通し脳活性化

臨床美術活用広がる

県内

「たくましいカボチャの生命力を感じて作ってください」。臨床美術活動「あわー」を展開する井沢ゆうか代表が呼びかけた。20日に米子市中心身障害者福祉センターで開かれた講座で的一幕だ。

■正解不正解なし

精神障害のある人や高齢者ら13人が参加したこの日の講座では、目の前に置かれたカボチャの感触などで感じたイメージを基に新聞紙で造形し、カボチャの皮の緑だけでなくオレンジやピンク、青といった和紙を思い思いに貼り付けた。

作業中には同じテーブルの人同士でアドバイスしたり、「すごく上手」などと褒め合ったり。最後には人面カボチャや、赤い点々が付いたカボチャなど全作品を並

べ、井沢さんは各作品のキラッと“光る”ポイントを紹介した。参加者の講座の様子を見て、同センターの石丸知所長は「障害の



参加者にカボチャの作り方を伝える井沢代表(奥) 20日、米子市皆生3丁目の市中心身障害者福祉センター

期待に自己肯定感向上 施設や高齢者作業所

ある人の中には自信をなくしている方もいる。正解不正解なく、自由に生み出したものが認められることが自己肯定感につながる」と意義を語る。

■喜びを共有

臨床美術は創作活動を通じて脳が活性化し、認知症の症状が改善させることを目的に開発された。現在、鳥取県内では高齢者施設や小中学校、保育施設だけでなく、作業所や障害のある人たちの団体などにも呼ばれて講座を開いており、ニーズは高まる一方だ。半面、鳥取県内の臨床美術士は現在27人とマンパワーが限られている実情もある。

活動の裾野が広がる中で臨床美術士も増やそうと今秋、新型コロナウイルスの影響で開催できなかった養成講座が予定されている。井沢さんは活動を通じて「臨床美術は人に与える、指導するのではなく、伴走するイメージと一緒に喜びを共有できる」と実感。「自分も相手も元気になれる。自分のために習得することで人のためになる。ぜひ講座を受けてもらえれば」と呼びかける。